【選択】なぜ古典を教えるのか

◆期日　平成29年8月7日（月）~8月9日（水）　9:00~17:00（予定）
◆時間数　18時間
◆主な対象　中学校・高等学校国語科教諭
◆定員　40名
◆会場　渋谷キャンパス
◆応募期間（仮申込）　平成29年4月17日（月）10:00~同4月18日（火）23:59
◆受講料　2万円
◆講習内容

どうして古文をやるの？――生徒にそう聞かれたらどうお答えになりますか。
当講習では、本学で、日本古典文学、国語学、民俗学、国語教育学等の研究・教育に携わる講師陣が、具体的な資料を紹介しつつ、それぞれの立場から古典の持つ意義について論じます（講座によっては演習形式を取る場合もあります）。そのうえで、受講者の皆さんには、実践家の立場から中学校・高等学校の国語科における古典教育の意義について考えていただきます。

◆担当講師
土佐　秀里　　國學院大學文学部准教授
野中　哲照　　國學院大學文学部教授
中村　正明　　國學院大學文学部准教授
石川　則夫　　國學院大學文学部教授
長谷川　清貴　國學院大學文学部准教授
小田　勝　　國學院大學文学部教授
小川　直之　　國學院大學文学部教授
杉山　英昭　　元國學院大學大学院客員教授
林　利久　　國學院大學文学部兼任講師
高橋　大助　　國學院大學文学部教授
豊島　秀範　　國學院大學文学部教授（ゲスト講師）

◆シラバス

講義名	古代和歌の「季節感」とは何か
担当講師	土佐　秀里
講義概要	和歌といえば、四季折々の風物を詠むものであり、日本列島の気候風土に即した「日本的」なものと考えられている。しかし、万葉集や古今集の季節詠をよく読んでみると、そこには皮膚感覚的な実感・実体験とはかけ離れた、ある種の「観念性」があることに気づかされる。その「観念性」とは、中国伝来の暦法に基づく季節認識であり、かつ、季節の順行が「政治的」な正しさを保証するという論理である。古今集の季節詠の多くが「屏風歌」というバーチャルな世界の産物であったことは改めて言うまでもない。古今集の観念性を批判した正岡子規は、万葉集の観念性には気づくことができなかったし、しかもヨーロッパ伝来の「リアリズム」の理論を和歌文学に応用した結果、和歌が「自然」の「写生」であるという新たなイデオロギーを作り出し、むしろ季節詠の観念性を延命させることに貢献したのである。本講は、こうした問題を具体例に即して辿りながら、実感主義・経験主義を脱した言

	語観を提唱しようとするものである。
評価方法	教場レポートにより評価する。

講義名	『平家物語』で身につける想像力
担当講師	野中　哲照
講義概要	「なぜ古典を教えるのか」という問いにたいする答えの一つに、「古典の中に人間の普遍的な姿を学びうるからだ」という言い方があります。時代を超えて生き残った古典には、いつの時代の人々にも訴えかけるものがあるということでしょう。 それにしても、物語が伝えようとしている意味を正確に読み解くことができなければ、古典を学ぶ意義も半減してしまいます。「現代語訳はできたのだけれど、作品世界が深く理解できたとは言えない」という状況が、それです。『平家物語』などの軍記物は、現代人が思う以上に、読者の想像力を要求している物語です。われあれは、心してかからなければ、その作品世界に入ってゆけないのです。 この講義では、『平家物語』などの軍記物で、緻密な豊かな想像力を鍛えます。その力が身に付けば、古典の授業が退屈なものから面白いものへと変身するはずです。
評価方法	講義にもとづく筆記試験による

講義名	『おくのほそ道』と古典解釈の視点
担当講師	中村　正明
講義概要	松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』は、現在でも多くの人々に読み継がれている国民文学ともいうべき古典であるが、いまなお多くの問題点を抱えている。その多くは本文や発句の解釈に関する問題点であるが、それらはすでに江戸時代からさまざまな解釈が成されてきたものである。更に、近年の『曾良旅日記』と芭蕉自筆本『おくのほそ道』の発見により、また新たな解釈が提示されるようになった。本講義では、そうした近年の新資料発見によって、作品解釈がいかに多様化したかを紹介していく。そして、そこから見えてくる「古典文学作品を解釈するための視点」や「解釈の方法」について、問題提起していくことにする。
評価方法	講義にもとづく筆記試験による

講義名	なぜ「舞姫」を読むのか
担当講師	石川　則夫
講義概要	森鷗外「舞姫」は現代文の定番教材として長く採用されてきたが、その文体はほとんど古典教材と言ってもよいほどの難しさがある。これを現代文教材として扱うことに躊躇する教員が多いのも当然ではあろう。したがって、現代語訳のテキストを使用して授業を行っているということも珍しい話ではない。また、「舞姫」のストーリーにしても、エリート官僚への道を突き進んでいた太田豊太郎が、自らの主体的な生き方に目覚め、立身出世の道を外れていくことも意に介さず、薄幸の美少女エリスとのロマンスを謳歌するが、再び官僚への道へ舞い戻ってしまう。つまりは出世のためにエリスを捨てて顧みない男として読まれるために、その節操のない行動は批判の的と

	もなってしまう。つまり、高校生においてはすこぶる評判の悪い男性像を教えなければならないことにもなって、その内容からも敬遠されがちな教材なのかもしれない。 　しかし、ではなぜ「舞姫」は日本近代文学史の最初期にいつも言及される作品なのだろうか。また、確かに文章は古く、明治の古典として位置づけられるところもあるが、この作品を古典として遠ざけてしまってよいのだろうか。 　この講義では、「舞姫」の新しさを掘り起こし、現代文としてこれを読まねばならない価値について考察してみたい。
評価方法	講義の最後の１０分程度の時間で４００字ほどのレポートを記述していただきます。テーマは講義の最初にお話しします。また、森鷗外「舞姫」を読んでおいていただきます。文庫版の本文で結構です。

講義名	長谷川　清貴
担当講師	中国思想の考え方――孔子の「仁」を例に
講義概要	現代において、古典、中でも漢文は疎遠の度合を増しています。漢文を学習するうえで、「なぜ中国の古い作品を読まなければならないのか？」という疑問は、通り一遍の解答は提示できても、なおその意義を考えなければならない根本的な問題であると思われます。 　高校「古典（漢文）」のほとんどの教科書では、思想文献として『論語』が掲載されています。その中で、孔子が重視した「仁」についても、ほぼ必ず関連する章が挙げられていますが、よく知られているように、『論語』中には、仁に関する記述は多くても、結局仁が端的に何を指すか判然としません。『孟子』は「仁」とともに「義」を重視し、その定義も、「惻隠の心は、仁の端なり、羞悪の心は、義の端なり」や、「仁は、人の心なり、義は、人の路なり」と比較的明快ですが、それが孔子のいう「仁」と一致するとは限らない。そのため、孔子の「仁」は一般的には、いつくしみ、おもいやりと解されつつも、その決定的定義は未だなされていないといえます。 　本授業では、中国思想の考え方の一例として、「仁」について深く掘り下げ、孔子が重んじた「仁」をどのように考えるべきかを考えます。
評価方法	授業の最後に、授業内容の要約と、内容に関する見解を答える試験を出題し、その内容によって評価します。

講義名	古典敬語のしくみ
担当講師	小田　勝
講義概要	古文を学ぶ意義のひとつには、言語教育としての側面があります。平成１９年、新しい「敬語の５分類」が提唱されました（文化審議会答申「敬語の指針」）。本講義では、この新しい５分類にもとづいて、古典敬語のしくみを解説し、古典敬語の理解が、現代語の敬語の本質的な理解に直結するものであることを示したいと思います。古典敬語の現代語訳は、現代語の敬語練習の場でもあるのです。
評価方法	講義にもとづく筆記試験による。

講義名	「伝承文学」という視点―古典と口承文芸―

担当講師	小川　直之
講義概要	日本の古典文学の中には、さまざまな伝承文化をみることができる。その伝承文化には、儀礼や行事などのほかに、昔話や伝説など、口承文芸とか民話などと呼ばれている口誦の物語がある。こうした古典の中に表出している、あるいは埋め込まれている伝承文化を見ていくと、日本文化がもつ持続性とか、変化・変容などを知ることができる。 平成28年度の講習では古典の中の口承の物語に焦点をあてることにする。具体的には「古事記」にある三輪山伝説、「平家物語」巻第八「緒環」と、昔話として伝承されている「蛇聟入」を取り上げ、口誦の物語が歴史過程で文字化されている姿を講じていく。「古事記」の三輪山伝説や「平家物語」の「緒環」は、いずれも始祖伝説といえる物語で、人物の特異性を語るときに異類婚姻譚が使われているのである。こうした異類の子孫の描き方と、老人が子どもたちにイロリ端などで語って聴かせた「昔話」としての蛇聟入の物語とを比較することによって、文字テキスト化された物語と口承の物語がどのように違うのかなどを捉えていく。 口承の物語を素材にした文学は、近代文学の中にも多くみられるし、中学生や高校生の多くが、子どもの頃に親しんだ絵本にも口承の物語が取り込まれている。こうした視点を授業などに取り込むことによって、国語教育に広がりを与えることができよう。
評価方法	小リポートの点数による。

講義名	学習材としての開発教材への構想
担当講師	杉山　英昭
講義概要	古来から、「かぐや姫の物語」とか「竹取物語」とか呼称された初期物語から、現在の我が国の古典文学の学習は開始され親しまれている。仏典や漢籍などの古代説話や、内外の諸伝承にもその淵源を見るこの物語は、そのスケールの大きさから古典文学学習の劈頭を飾るにふさわしい教材だと評することができる。「竹取物語」の教材化の歴史は古いが、現代においてはどのような文学作品が学習材としてふさわしいかという問題は、古典文学研究の進展と現代という時代への認識とによって考究されなくてはならない。ここでは古典文学の教材化の視点から、古筆を含めた教材原本文や古典や近代の絵画資料など、教材のビジュアル化の問題をも含めて、新学習指導要領改訂を視野に入れて、学習材としての古典文学教材を構想してみたい。
評価方法	小論文叙述による評価。二つの問題のうち、一問題を選んで論述する。

講義名	古典籍を用いた教材作成と「学びへの誘い」
担当講師	林　利久
講義概要	古典文学を学ぶには、原文を読む力が重要です。しかし、古典文学の中で描き出される日本の文化は、現代の社会と余りにも掛け離れていて、学ぶ者には大きな違和感を与えているのではないでしょうか。 ビジュアル資料を用いて古典文学を考える面は様々な部分で語られています

	が、國學院大學図書館所蔵のデジタルライブラリーなどから、古文書「織田信長朱印状」、「豊臣秀吉朱印状」、「吾妻鏡（古活字版伏見版）」、古典籍「月々のあそび」、「竹取物語絵巻」、「伊勢物語絵巻」、「伊勢物語（奈良絵本）」、「義経奥州落絵詞（絵巻）」等の資料を用いて映像資料を作成し、古典文学や日本の文化についての授業に活用できる資料作成について考えてみます。古典資料と現代の活字資料を融合することで、生徒たちに古典文学や日本の文化についての新たな興味を引き出す機会と方法を考えてみます。 　また、ネット上に散見できるサイト等を紹介し、授業への活用を紹介します。
評価方法	

講義名	古典教育の現在について
担当講師	高橋 大助、豊島 秀範
講義概要	本講義は、以下の二部構成で実施いたします。 １　訳文を使用した源氏物語の授業の紹介(高橋)。 　現行の学習指導要領では、古典の授業に際して、中学校でも高等学校でも「現代語訳」の適切な活用が求められています。訓詁注釈によらないオルタナティブな古典の授業とはどんなものでしょうか。ここでは、新たな古典授業の可能性を考えるために、『源氏物語』の訳文を使った授業実践を紹介いたします。 ２　源氏物語の本文と和歌との関わりと口語訳(豊島) 　『源氏物語』にある 794 首中の和歌のうち最も多くを有する「須磨」巻を取り上げて、以下の 3 点について考えていきます。 　①『源氏物語』の本文の実態について。 　②『源氏物語』の説明文（地の文）と和歌について。 　③和歌の現代語について 上記の①～③について、現在の研究状況を考慮しつつ、それぞれ具体例に即して、一緒に考えていきたいと思います。
評価方法	講義にもとづく筆記試験による